

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<口述> モビリア仮設住宅のこれまでとこれから

著者	千田 勝治
出版者	法政大学大原社会問題研究所
雑誌名	大原社会問題研究所雑誌
巻	665
ページ	2-7
発行年	2014-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/8949

[口述]

モビリア仮設住宅のこれまでとこれから

千田 勝治

震災当日

私は現在、陸前高田市にあるオートキャンプ場モビリアにある、モビリア仮設住宅自治会の会長をつとめている。

東日本大震災から2年8ヶ月が経過した。平成23年3月11日、私は市議会活動の一環で、委員7名で教育民生常任委員会の会議中に、市役所にある4階の委員会室で、強い地震に遭った。

そのとき、とうとう想定されていた宮城県沖地震が起きたかと思った。これまでの生涯で、これだけの強い地震を感じたのは初めての経験だった。そして、これは大津波がくると、途端に感じた。

私はかき養殖とわかめ養殖を生業としている。地震の直後、市役所前の駐車場にとめてあった自分の車で、帰宅前にまず漁港へ漁船の確認に行った。そのときには引き潮が始まっていた。それを見て津波がくると思い、急いでUターンをして自宅に戻った。

当時、私の統一地方選挙が1ヶ月後に控えており、家族そろって選挙事務所の準備をしていたため、家族は全員そろっていた。自宅に着くと、裏山のほうから声が出て、そちらに避難をしていたからということで、私も自宅の裏山に登って様子をうかがっていた。

私の漁港は広田湾の最奥部にあり、そこには6メートルの防潮堤があり、その背後には干拓地がある。高台に着いてから、おおむね10分ぐらいだったと思うが、その干拓地の崖の真上から様子をうかがっていたとき、大きな津波が防潮堤を越え、干拓地に波がまくれるようにして、おかに上がってきた。

対岸の小友町にある三日市集落が、その津波で全て壊れていく姿を真上から見ていた。とんでもないことが起きたというふうに関じ、津波がくるのを見ていたが、やがて、先ほど帰宅前に漁港に行って見た自分の船が、その防潮堤を越えて、ひっくり返った状態で、目の下を通過した。とうとう船までいったかというふうに関じた。

そして、干拓地に押し寄せる本流と、自宅のある沢の津波の高さに驚いた。本流を押す津波よりも、沢に入った津波のほうが水位は高い。この状況は何だろうというふうに関じた。本流を押す津波のエネルギーが強いために、いったん沢に入った海水が下がることなく、どんどん遡上してくる姿を見て、津波というのはこういう現象もあるのかというふうに関じた。その沢に入った津波で、

自宅の家屋は全部被災してしまった。

津波が何波かくるのをずっと見ていたが、夕暮れになったので、家族9人と隣の家族2名を連れ添って11名で、山の尾根沿いにオートキャンプ場モビリアをめがけて避難をした。そのとき、周りは薄暗くなっていた。何時かは覚えていないが、オートキャンプ場の事務所がセンターハウスという場所にあり、その晩は皆、寒空の中、そこに避難して一夜を過ごした。

避難直後

翌朝になり、モビリアに何人の方々が避難をしてきたか、人数把握に努めた。このモビリアは、陸前高田市の広田半島に位置し、今回の津波で、裏浜からの津波と表浜からくる津波が合流をした場所で、陸の孤島になった場所に位置するところである。そこに避難してきた約400名の避難者の名簿を作成した。自分たち被災者のほとんどは着の身着のままで避難してきたために、避難者の名簿を作ることも自体も困難を極めた。というのは、紙1枚もなく、ペンもなく、どのようにして避難者の記録を作るかということだったので、ちょうどセンターハウスにあるカレンダーを刻み、それで名簿を作成した。

このオートキャンプ場に地域住民の方々が避難した当日の夜から炊き出しが行われ、おにぎりが2個ずつ分配された。翌日からは、被災されない住民の炊き出しで、数日間、その方々の支援を受けて、モビリアに被災した方々が食料を手にすることができた。

被災した当時のことの時系列での記憶はほとんど残っていない。今になって、あのときこういうことがあったな、こういうこともあったなということを思い出すのが精一杯で、何月何日、何をしたかという記憶は、ほとんどリセットされた状態である。今になって精神的にも落ち着き、ああ、あんなこともあったな、こういうこともあったなと思う日々を今過ごしているところである。

モビリアでいちばん緊張したことは、当時、通信手段が一切なく、陸の孤島になったわけで、救急車を呼ぶこともできないことだった。被災者住民の中に透析をやっている2名の男性と、カテーテルを入れている2名の女性があり、この方々をどのような形で搬送するかということになった。たまたまモビリアキャンプ場には、多目的サイトであるイベント広場という広い場所があり、そこにヘリポートを設置した。被災後、たしか3日目と4日目だと記憶しているが、当時、上空に全国からさまざまなヘリが20機ぐらい飛来していた。芝生のところの広場にヘリポートのHを書いて、SOSを書いた。上空からヘリが「どうかしましたか」と無線で放送してくれたので、手招きをして、その芝生サイトに降りてもらい、その日は男性1名と女性1名の高齢者を搬送した。翌日には、残りの男性1名、女性1名を搬送した。

避難所は病人を抱えていたので、非常に緊迫感にあふれていた。そういう搬送もしたので一安心して、これからどのような形でこの避難所を運営するかということを住民の方々と相談して、その避難所の代表世話人に私が選任された。その日から毎朝6時半からミーティングをして、避難所運営に努めたところである。

全国からの支援

オートキャンプ場モビリアは、市の避難所の指定は受けておらず、本来であれば、モビリア周辺

の地区は、田東部落という部落会の公民館が避難所に指定されていた。しかし、その地区の公民館に避難しないで、オートキャンプ場に皆さんが避難してきたため、モビリアが自動的に避難所になってしまった。モビリアは、東北でも唯一優れた整備の整ったオートキャンプ場のために、時節になると全国からキャンパーが大勢訪れ、ニーズの高いキャンプ場として利用されていた。そこが避難所になったので、オートキャンプ場の運営はできなくなってしまった。

やがて、そういう避難所生活をしている中で、全国からさまざまな方々や、支援物資が入るようになったので、私は賄い班と支援物資を受け入れる担当の二つの班に分け、賄い班のリーダーや、支援物資を受ける責任者を決め、モビリアの運営に努めた。食事の準備等は約10名の女性スタッフの方々に、毎日避難所での賄いをしていただいた。

支援も、全国のたくさんの方々からいただいたが、オートキャンプ場モビリアと検索すると、そこが避難所になっていることがわかるため、自動的にアポなしでどんどん支援物資が入ってきた。この支援物資の受け入れを、どのような形で処理したらいいか、当初は本当に困惑した。

このまま支援物資を毎日避難者に配っていると、避難所で毎日生活しているのに、寝る場所も確保できなくなることが想定されたので、最低限度、避難所で10日間ぐらいは生活できる程度の支援物資は平均に配り、その後については地区公民館、部落公民館長をお願いをして、物資を預け入れる場所として了解をもらい、そこに全国からいただいた支援物資を仮設住宅ができるまで預かってもらった。朝のミーティングで、仮設住宅ができたならば、いただいた支援物資を平均に皆さんにわけるのでということで了解をいただき、そのような形で物資の受け入れに努めた。

また、被災後10日ぐらいしてから、自衛隊に幹線道路のがれきを撤去してもらったので、市街地のほうにも行くようになった。通行が可能になってからは陸の孤島になっていて、自分の家に戻れなかった方々もモビリアに避難してくるようになった。

3月末だったと記憶しているが、京都からのNGOであるNICCOという支援団体のドクターが入ってきた。そのドクターと看護師、臨床心理士等、男女あわせて10名ぐらいの支援団体が、モビリアのケビンというハウスのところに二部屋を借り、そこに常駐してもらい、避難所での医療活動をしていただいた。

当時、モビリアの避難所に、老人福祉施設に勤めている27歳の女性がおり、その方が、たまたま血圧計を持っていたので、私の了解を得て、毎日、避難者の血圧測定を実施していた。その女性は、それぞれ避難者の中で、毎日薬や、慢性疾患を持っている方々の調査もして、簡易的なカルテを作成した。そこにNICCOのドクターが来たので、一人一人どういう薬を飲んでいるのかなどについて把握できていたので、すぐその場で処方をしていただいたということで、NICCOのドクターも本当にびっくりした状態であった。

お薬手帳や処方箋などを持っている方については、すぐ掌握できたが、被災者で自宅が流されるなどした方々については、そのドクターに往診をしていただき、問診で、一人一人のカルテを作り、その後については、そのドクターから日々薬の提供を受けた。そういうことでもモビリア避難所は恵まれた場所であった。

被災した当時は、モビリアはけっこう風邪をひいている方が多かったが、それが皆さんにまん延することなく、薬の処方等をしていただいたおかげで沈静化したということもあった。

[口述] モビリア仮設住宅のこれまでとこれから（千田勝治）

6月ごろになり、被災される前からモビリアのお客さんとして来ていた方々が中越の長岡から来て、そこには中越防災安全推進機構という法人があり、中越地震で震災を経験した方々がモビリアに入ってきた。モビリア、避難所、それから仮設住宅ができるまで、その方々のさまざまなご支援をいただいた。やはり、震災を経験された方々であり、中越で中核的な形で避難、それから災害の支援をされた方々なので、ノウハウを持っており、そのノウハウを避難所に伝授していただき、さまざまな指導にあずかった。その方々は、モビリアの自治会ができるまで1年半ぐらい常駐して、ずっと私らのために支援をしてくださった。

仮設住宅の建設

7月になると、仮設住宅がモビリア場内にできてきたので、7月15日ごろから被災された方々の入居が始まった。8月になってから、モビリアのキャンプ場のテントサイトに、一戸建ての木造住宅が建設された。8月15日ごろまでには被災者が全員、これらの仮設住宅に入ることができた。

このモビリアは、陸前高田市内で戸数のいちばん多い仮設住宅であり、一戸建てが108棟、長屋方式が60棟、全部で168棟と、陸前高田市ではいちばん大きい仮設住宅の集落となった。

モビリア自治会とNPO法人の設立

やがて、皆さんが仮設住宅に入居したので、8月末に全体会を開き、モビリア自治会を設立した。全体会で協議したあと、たしか9月2日だったと思うが、モビリア自治会の設立総会を開き、自治会が設立された。翌年24年2月に、ここのモビリア自治会から「陸前たがだ八起プロジェクト」というNPO団体が認可され、設立された。

「陸前たがだ八起プロジェクト」は、モビリア自治会をサポートするということで立ち上がったNPOで、現在も6人の方々が八起プロジェクトにスタッフとして所属していて、モビリアのさまざまな自治会運営に協力をいただいている。

モビリア仮設住宅場内には現在、300名ほど居住している。その方々の支援をするため、私はさまざまな形でいろいろなことを考えている。仮設場内に集会所が3ヶ所あるが、被災者の中から管理人を雇って、被災者の方々が常に集会所を利用できるよう、環境作りを整えた。そのために、場内の被災者の方々から10名の管理人を雇用して、被災者の方々がお茶飲みなど、いつでもさまざまな形で寄れる環境作りを構築した。

モビリア自治会が発足した23年9月から24年8月までの約1年間に、モビリアに全国からさまざまな形で支援団体が入った。初年度は210回のイベントを企画し、実施した。2年目の今年は、9月15日に2回目の総会を開催し、2年目のイベントの企画回数は218回で、3日に2日は必ず何らかのイベントをやっていることになる。そういう意味でもモビリア仮設住宅は非常に恵まれた環境にある。それも、そのサポート役となるNPO法人の八起プロジェクトがあるからであり、そこは自治会長のサポートも担っている。

モビリア自治会の現状

現在は168世帯のうち、ここ2年で自立再建によって10名ほどの方々が仮設を出ていった。モ

ビリアはさまざまな形でイベントを開催しているために、テレビや新聞等で常に報道されており、他の地区の自治会から、モビリアはすぐうらやましいなという声も多々聞こえてくるので、非常にニーズの高いところであり、モビリアは空き家がでてもすぐ次の方が入ってくるというところで、今のところ、モビリアの自治会の仮設住宅は全室埋まっている。

ここにきて他の地区の自治会の話を聞くと、大きいところはほとんど小中学校の校庭等に仮設住宅があるため、自立再建で出た方々の部屋はそのまま、あとは空き家になっていくという状況のようだが、モビリアに限ってはすぐ満室になるという現状である。

ここ2年間で過ごすなかで、地域住民の隣同士が、コミュニケーションが取れ始まって、人間的にもつながりが強くなったところに、自立再建で出ていく人たちが出てきた今日であるが、やはり自分はこれからどうなるんだろうという一抹の不安を抱えている人たちも見受けられる。そのためにモビリアとしても、さまざまなイベントを繰り返し入れて、少しでもその気持ちを、不安を忘れられればいいということで、イベントを開催しているところである。

被災者の今後の課題

復興計画の進め方であるが、陸前高田市の場合は、市内32ヶ所の防災集団移転の協議会有る。この防災集団移転の造成の完了が、平成28年度末ということになっている。したがって、最後になる方は、これからまだ2年先、3年先にならなければ自分の家は建てられない。

いっぽう、防災集団移転のほかに、高田の市街地などは、土地区画整理事業で高台に移転するわけだが、その方々が旧市街地の場所の利用方法などで、高田市としても非常に計画の進捗に影響を及ぼしているということも聞こえてきている。

復興計画の高台移転の中にさまざまな形の事業がある。自立再建や防災集団移転で自分のすみを確保できない方々については、公営住宅に入ることになっている。その公営住宅は、陸前高田市の計画では、県営で建てる公営住宅は700戸、市直営で建てる公営住宅は300戸、合計で1,000棟の公営住宅の建設が計画されている。

東日本大震災の個人的な総括

陸前高田市では、3,800世帯が津波で被災してしまったということを考えると、やはり高台に移住するのがいちばん良策だとは思いますが、そのなかで、今回1,800名もの方々が犠牲になった。なぜそれだけの津波による被災者が出たかというと、私の経験したことであるが、平成5年の大冷害があった年に最初の津波を経験した。その平成5年の津波から一昨年3月の津波まで、私は5回の津波を経験した。生業のかき、わかめ養殖は、そのつど甚大な被害を受けた。陸前高田市の広田湾で営む漁業者にとっては、過去4回の津波で手痛い被害を受けているので、非常に危機管理意識が高かった。

したがって、今回の陸前高田市の津波でも、生業とする漁業者、海のそばで生活をしている方々はほとんど亡くなっていない。度重なる津波がきているわけで、常日頃の津波に対しての危機管理意識が高く、いち早く避難した結果だったと思う。

過去4回の津波は、防潮堤を越えることがなかったのに、今回の津波で反省しなければならない

[口述] モビリア仮設住宅のこれまでとこれから (千田勝治)

ことだが、市街地で生計を立てられていたそれぞれの方々、会社を経営していた方々、商店を経営されていた方、また大丈夫だろうという気持ちを持った方々が、ほとんど犠牲になってしまった。

本来ならば、陸前高田市にとっては、津波がしょっちゅう押し寄せている地域なので、市民全員の危機管理意識が高くなければならないはずだが、逆に常襲地域だけに、また大丈夫だろうと思っただけの方々が犠牲になったということは、やはり危機管理意識の持ち方が、今回の津波で、それぞれの方々の生死を分けてしまったというのが現実である。これからその辺の検証をきちんとして、防災計画を立てなければならぬと思っている。

(ちだ・かつじ モビリア仮設住宅自治会長)

《法政大学大原社会問題研究所叢書》

法政大学大原社会問題研究所／菅 富美枝 編著

成年後見制度の

新たなグランド・デザイン

人びとが保護の対象から自身の権利を行使する主体となるための支援とは何か。ケア、介護、消費、福祉など、さまざまな現場と世界の最新状況から、成年後見制度を再構築する。 5985円

法政大学大原社会問題研究所／原 伸子 編著

福祉国家と家族

一九八〇年代以降に福祉国家が縮減する過程とグローバル化の下で家族政策が主流となっていく文脈を、米・英・独・スウェーデン・日本などの歴史的な事例を通して比較検証する。 4725円

船橋晴俊、壽福眞美 編著

公共圏と熟議民主主義

《現代社会研究叢書9》
現代社会の問題解決

今日の原発・エネルギー問題、移民の受け入れ、環境破壊、基地問題など、現代社会の諸問題を公共の場での熟議を通して解決するために、日本と諸外国の具体的事例をもとに検討。 4935円

ニクラス・ルーマン 著

《叢書・ウニベルシタス961・962》

社会構造とゼマンティク 1・2

社会学の可能性を開く新たな社会システム理論はあるのか。法や教育、社会理論など多様なテーマに関して行なった思想的な研究。①巻 徳安彰訳：5040円／②巻 馬場靖雄・他訳：5460円

ウォルフガング・ソフスキー 著

《叢書・ウニベルシタス988》

安全の原理

自由と安全のどちらを選ぶのか。自然災害、金融、経済不安、原発事故、紛争、テロなど、現代社会に顕著に現われる安全をめぐる諸問題について考察。佐藤公紀、S・マスロー訳：2940円

法政大学出版局

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-3
TEL 03-5214-5540 / FAX 03-5214-5542

<http://www.h-up.com/>
※表示価格は税込みです